

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①全学級で基礎・基本の定着を図るために、朝学習で漢字、計算のドリルを行う。家庭学習に全校で取り組むことで、学習習慣の定着を図る。②年間指導計画や評価規準を明確にすることで、教科等間のつながりを考えながら、子どもの主体的な問題解決を大切に授業を展開をしていく。	①朝学習での漢字ドリルや計算ドリルの取組から、基礎的・基本的な内容の習熟が見られるようになってきた。②年間指導計画や評価規準を明確にすることで、教科横断的な視点に立ったカリキュラム・マネジメントを促進することができた。	A
豊かな心	①授業を通して、子どもが自分の心を見つめ、「今の自分に必要な見方・考え方」を見出すことができるようにする。②たてわりパディ活動を通して、子どもたちが「自分のよさ」を豊かに発揮し合える集団を創ることにより、自他の優劣にとらわれないことなく自己有用感をもてるようにする。	①授業を通して、子どもが自分の心を見つめ、自分の考えをもち、友達と交流する姿が見られた。②たてわりパディ活動を通して、学年を超えて交流することができた。より交流を深め、特に高学年が自己有用感を高められるように、内容や回数について今後も検討をしていきたい。	A
健やかな体	①授業を通して、運動に親しみ、自己の健康の大切さを認識できるようにする。また、体力向上1校1実践運動で縄跳びに取り組む。②学校保健委員会で体幹を鍛える取り組みを推進し、けがの防止や多様な動きに対応できる体づくりを行う。	①授業で取り組んだ動きを休み時間にも取り組む児童が増えた。敏捷性については今後も体力テストで経年的に見る必要がある。②くねくね体操やにがに体操など体幹を鍛える取り組みが定着し、けがの防止につながった。また、各学年に合ったリズムジャンプを繰り返し行うことで多様な動きも身に付いた。	A
社会参画	「自分の考えをもち、自ら社会参画しようとする子どもの育成」を目指し、①資料活用、②振り返りを授業改善の視点とし、国語科・社会科を中心に事前検討、研究授業、事後研究会などを通して検証する。また、他教科においても手立てを意識して授業改善に取り組む。	問題解決に向けて、子どもが何をどのように思考するのかを考え、教師が授業づくりをすることで、友達との対話の中で考えを広げたり深めたりする子どもの姿が見られた。今後、学習の振り返りをどう評価に結び付けていけばよいか、さらに研究を重ねていきたい。	A
特別支援教育	①特別な配慮を必要とする児童に対し、個の見取りを丁寧に行い、個の特性に合った細やかな支援・指導を進める。②研修の内容の幅を広げ、指導に役立つ勉強会なども行っていく。③個別の教育支援計画・指導計画の確実な作成とともに、新たな活用方法を校内で検討し、取り組む。	①特別支援教室を活用し、担当教諭と担任が連携して指導してきた。校内で情報を共有した。②障害のある児童の進路選択の研修を行った。教師や保護者が、進路を見据えた支援を考えるきっかけとなった。③校内研修をし、確実に作成するようになった。引継ぎや保護者との連携に役立てた。	A
保健管理・食育	①保健室入室状況や健康診断の結果を分析し、基本的な生活習慣を身に着け、健康な生活が送れるよう保護者との連携を図る。保険だより等、情報発信に努める。②外部機関を効果的に活用し、全学年に食育の授業を行う。また、家庭でも「食」に興味をもてるよう、定期的に食育だよりを発行する。	外部機関、校内で連携し、食育の授業を行った。授業を通して「食」に対して興味をもち、給食の時間には今まで苦手だったものに挑戦する子どもたちの姿が見られるようになった。一方で生活習慣について、各家庭で意識の低が見られる。今後は家庭に発信できるような取り組みを考えていきたい。	A
地域連携 学校運営協議会	①学校行事や、様々な地域行事での子どもたちの様子について御意見をいただき、(アンケート・学校運営協議会)今後の学校経営に生かす。②100周年を見据えて、実行委員会の立ち上げや、関連行事の計画をすすめる。	①保護者・地域からの意見を基に、学校行事や各自の授業づくり等を見直し、改善に向けての手立てとした。学校の良さを見出し、それをさらに伸ばしていく励みともなった。②100周年実行委員会を立ち上げ、教員・児童だけでなく、地域と協力して周年行事を盛り上げる計画を立てている。	B
いじめへの対応	①職員が日頃から児童の様子をよく見て把握し、職員会議だけでなく、日常的に児童に関する情報交換を密に行うとともに、家庭や関係機関とも連携を図る。②子ども同士のトラブルでは、「本当はどうしたかったのか」「どうしたらよかったのか」を子ども自身が語ることで、人間関係力を育てる。	①情報交換を日頃から密に行い、職員会議でも改めて全体で共有した。初動の早さと指導支援の方向性の一致を大切にし、家庭や関係機関とも連携を図った。②子ども同士のトラブルでは、「本当はどうしたかったのか」「どうしたらよかったのか」を子どもに問いかけ、自己解決力を高めた。	A
人材育成・組織運営 (働き方改革)	①本校が初任校である教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが関わって活動を推進する。②週に一度の教務会と、ブロックリーダー会を行い、全体を見通して学校運営していく場を設定する。③学校運営や各種行事をプロジェクトチームが中心になって行うようにし、負担が偏らないようにする。④グループウェア等を	教務会で情報を共有し、職員が仕事をしやすい職員室を目指してチームで職務に当たることができた。プロジェクトを中心として業務分担することで、仕事量の偏りが幾分か改善の方向に向かった。メンターが活動する際には多くの教員が関わり、授業づくりなどの様々な視点から若手職員が学びを深めることができ	A
ブロック内評価後の 気づき	本校では教職員が子どもたち一人ひとりのことをよく把握して教育活動にあっている。授業を通して子どもたちの自己有用感を高めていく(学校教育目標を達成していく)ために、教職員一人ひとりがそれぞれにできることを考えて職務にあっていることが分かった。3校で小中のつながりを考え、この地域の子と連に付けた力を考え、目指す方向を考えたらうで、それぞれの学校で教育活動にあたることができたが、教職員同士がさらに理解し合える機会を作ることで、よりつながりを意識した教育活動ができるのではないかと感じた。		
学校関係者 評価	学校教育目標が地域にも浸透し、町ぐるみで子どもたちを育てることができている。登下校等での見守り活動でも、子どもたちが明るい表情で生き生きと登校している姿が多くみられる。教職員がこころひとつに教育活動にあっていることが分かる。授業研究や各行事における教職員の子どもの向き合い真摯な姿を見て、子どもたちも頑張ることができている。学校保健委員会での取組で、子どもたちの体幹が鍛えられ、実際にかなりけがが少なくなっていることに驚いた。学校全体でそのようなことに取り組むことができる体制が素晴らしい。		
中期取組 目標 振り返り	授業研究を学校経営の核に据え、教職員が協働で子どもの資質・能力を伸ばす授業を実現することができた。横浜優秀チーム賞(いいないいな稲荷台)をいただき、同僚性の中でお互いの力量を向上させるべく、努力する教職員の励みにもなった。家庭への支援が欠かせない子どもも多く、職員全員体制で対応に当たるチーム力は、早期発見、きめ細かな継続支援につながっている。プロジェクト活動も実を結びつつあり、縦割りパディ活動、くねくね体操など、具体的な取組が、見える形の成果につながっている。各取組分野の目標をバージョンアップし、さらなる学校改善に努めていきたい。ありがとう		

重点取組分野	令和2年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	b1		
豊かな心	b2		
健やかな体	b3		
社会参画	b4		
特別支援教育	b5		
保健管理・食育	b6		
地域連携 学校運営協議会	b7		
	b8		
いじめへの対応	b9		
人材育成・組織運営 (働き方改革)	b10		
ブロック内 評価後の 気づき			
学校関係者 評価			
中期取組 目標 振り返り			

重点取組分野	令和3年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	c1		
豊かな心	c2		
健やかな体	c3		
社会参画	c4		
特別支援教育	c5		
保健管理・食育	c6		
地域連携 学校運営協議会	c7		
	c8		
いじめへの対応	c9		
人材育成・組織運営 (働き方改革)	c10		
ブロック内 評価後の 気づき			
学校関係者 評価			
中期取組 目標 振り返り			